

台湾抗日左派指導者連溫卿とその稿本

近年日本では曾つての左翼運動に関する研究及び関係者の回顧録の刊行が盛んである。

これら出版物のうち、山川均周辺とエスペラント運動を扱った関係書に必らず登場してくる台湾出身の人物に連溫卿がある。例えば山川均夫人菊栄氏の名著『女二代の記―わたしの半自叙伝』（日本評論新社、一九五六年五月、現在増訂されて平凡社の東洋文庫A二〇三Vに納められている）に登場してくる陳氏（日本評論新社の初版本では二六二頁、平凡社本は二四九―二五〇頁、但し平凡社本の増訂部分「台湾青年の間に社会主義を」の項では連の病歿を知ってか陳氏から連溫卿に改められている）、または向井孝著『山鹿泰治―人とその生涯』（青娥房、一九七四年五月）にエスペラントイストの同志として山鹿の回顧の対象になっているのがそうである。

連は一九五七年十一月、病気で辞世している（毛一波『哀悼連溫卿先生』、『台湾風物』第七卷第六期、一九五七年）享年六三才であった。

なお連の本名は嘴と云い、日本帝国が台湾を植民地化する一八九五年、まさに記録に値いするその年の四月九日に

彼は生を台湾に享ける。

学歴は公学校（台湾人のみを收容し、普通教育を施した小学校）卒業のみで、独学によってエスペラントを物にしたという。

彼はエスペラントと社会科学の学習を通じて、山川均・菊栄夫妻の門下生山口小静にめぐりあう。

山口との同志的つきあいの縁から連はさらに山川夫妻と、最初は文通、後には対面（筆者の調べたところでは連は一九二四年と三〇年、日本を訪れている）の上で師弟の関係を結んだ。そればかりでなく、同志的関係をも結んだようである。

連のエスペラント運動歴は彼自らが史可乗のペンネームで光復後（台湾の中国復帰後のこと）に発表した「人類之家・台湾ESP学会」（『台北文物』第三卷第一期、一九五四年五月一日）においても、国民党当局に対する政治的配慮があった為か、明らかにしていない。

しかし彼のエスペラント運動での盟友蘇璧輝が一九〇八年にはエスペラントを学び始めていることと、JEA（日本エスペラント協会）東京支部の児玉四郎が一九一三年、

台北に移住するとともに同地で始めた講習会(第一回、一九一三年九月一日開講)に彼が参加していることから、連の同語の学習はすくなくとも一九一三年九月には始まっていることは確実であろう(日本エスペラント運動五〇周年記念行事委員会編『日本エスペラント運動史料』、一九五六年一月、二二―二三頁参照)。

児玉は先の講習会において蘇、連、栗田、確(総督府編修官)等一〇数名の参加を得た。同年一月一五日講習終了の日に児玉はさらに台北苗圃前の自宅でJEA台湾支部を結成してエスペラントの普及に努めた。

児玉を中心とする台湾でのエスペラント運動は先に引用した『日本エスペラント運動史料』によると、おおよそのところ、一九一三年夏から翌々年、すなわち一九一五年の初夏までの二年間のきわめて短いものであった。

幸か不幸か、恰度この時期の台湾においては、辛亥革命の烽火の波及で、抗日、祖国復帰武装運動事件が画策・決行を含めて頻発した(詳しくは拙稿「台湾の詩と真実―羅福星の生涯」、『日本人とアジア』所収、新人物往来社、一九七三年一〇月参照)。

なかでも羅福星事件(一九一三年末、苗栗事件ともいう)西来庵事件(一九一五年夏)は台湾総督府をはじめとする植民地当局者を震撼せしめた。

り、エスペランティストであった夭折した秀才山口小静はほぼ同じ頃の一九二一年一〇月に肺結核の療養で帰台していた。

小静とは当時の台湾神社(北白川能久親王を祀つていた)の宮司、山口透の娘のことである。透は連が生れた年に台湾制庄の為に派遣された近衛師団(師団長は北白川親王)の従軍記者を務めたことがある。その意味で山口一家は「台湾縁故者」といってよい。若い進歩的台湾青年連温卿と台湾統治当局につらなる山口家出身の熱っぽい行動者であり理論家でもあった「造反娘」の出会いはいわば自然の成り行きでもあった。

連はこれを機に山川夫妻との交流を深め、後には台湾におけるもっとも信頼できる同志の一人となる。

「台湾共産党」が日本共産党台湾民族支部として上海において結成される一九二八年春迄、連は山川の影響と指導下に台湾での活動を行う。まさに山川一派と目されていたこともあって後には台湾の正統派共産主義運動の陣列から排除され、第二次大戦中は商業を営みながら民俗学の研究にはげんだ。光復後においても彼は実践運動に復帰することなくささやかな文筆活動で晩年を過ごしたのもようである。

それはさておいて本誌に紹介する連の稿本は下記の経緯

台湾抗日左派指導者連温卿とその稿本

このような時代背景もあったのであろう。台湾人エスペランティストへの監視と威脅はきびしくかつはげしいものがあつた。当然のことながら当局の日本人エスペランティストへのいやがらせもしくは警告もまだあつたことは想像に難くなくあろう。それが理由の一部となつたかも知れない、児玉は一九一五年六月に離台帰日し、運動は挫折する。

しかし、ほどなくして十月革命と五・四運動の二つの嵐は台湾にも吹き及び、台湾での抗日運動は曾つての農民を中心とする武装蜂起が一時中断をみて、新たに島外留学生(中国大陸と日本への留学生が中心)知識人ならびに民族ブルジョアジーを中心にした近代的抗日運動の展開が始まる。

この時代風潮は連と蘇を駆ってエスペラント運動再建に赴かせた。

連は有名無実化したJEA台湾支部を改組して台湾ESP学会とする他、自ら主編の大役を担って月刊紙『緑蔭』VERDA OMBROをも刊行(一九一九年―一九二四年)する。

同じ頃、彼は新思潮の影響から共産主義に興味をもち、中国語訳の共産党宣言を手に入れ社会主義および社会科学の研究会を若い同志達と始めるのもあつた。

今なお多くの関係者にその若死(一九二三年三月、享年満二三才)を惜しまれている活動的な女流社会主義者であ

によつて入手したものである。

そもそも筆者が連温卿の日本における関係者を発見するのは勁草書房刊の『山川均全集七』(一九六六年八月)に収められた「植民政策下の台湾」編者注(本篇は山口小静氏(第5巻参照)の台湾におけるエスペランティストとしての同志連温卿氏の厚意によつて入手した資料にもとずく部分が少なくない。)を同書の刊行直後に読んだのが契機であつた。

しばらくしてさらに池田敏雄氏(平凡社)の御教示により、沖繩出身の碩学比嘉春潮翁の伝記『沖繩の歲月―自伝的回想から』(中公新書一九六九年三月)に連がR氏として登場しているを知るに及んで、友人の中村女史に比嘉翁訪問の斡旋方を頼んだ。その結果、比嘉翁とは二度、すなわち七二年七月五日と七三年二月二四日にお会いでき、インタビュ―をも許された。

第一回目のインタビュ―にお貸し頂いたのが一九五四年九月二八日付の比嘉氏に宛てた連の私信と「旅行を了りたる人の日記」(一九三〇年)である。その際、比嘉氏は「連さんの未発表の稿本が一綴りあるが、何処にしまひ込んだのか見当らない」といわれた。

翌七三年初頭の頃と記憶している。中村氏を介して翁から、稿本が見つかったから見に来ないかのお誘いがあつて

稿本の借覧をかねて第二回のインタビューを試みた。

この時に頂いたのがここに発表する「台湾に於る日本植民政策の展望」（一九三〇、八、一三）の末記と「送先改造社内」の朱記がある。なお、本誌においては「台湾に於る日本植民政策の実態」と改題した）、祖国復帰後の台湾で執筆した「土地収奪過程」と出版依頼の「内容目次」およびその見本の一部「六節 収奪の進化」の三つの稿本である。先にあげた連の比嘉さん宛の私信と出版依頼の為の見本の表書きから推測するに、彼は戦後『日本統治期間中を通じて台湾で行はれた土地収奪過程』を仮題にした自著を旧知のアナキスト系エスペランチストと山鹿泰治と比嘉春潮の両氏に刊行交渉の依頼を寄せていたようである。

本稿本の詳しい解題は掲載完了後に試みるとして、これらの稿本を一覧するに、当年の台湾左翼運動家と日本人運動家の関係がある程度読みとれることが第一の特徴としてあげられうる。また日本の植民地統治を連が実践家としての見聞と官憲側の言論弾圧で埋もれていた第一次資料を駆使しての分析と位置づけが明確に提示されていることで、

台湾側の臨場感あふれる証言ともなっている。貴重という他ない。本稿本の公刊を契機に、埋もれている資料の発掘と、関係研究のより一層の深化を期待したい。

なお、筆者は、誤字、脱字、統計数字ならびに註記の校訂を試みた、お断りしておきたい。

また連の生涯は文中の引用文献以外に、台湾総督府警務局編『台湾社会運動史』東京龍溪書舎、完全復刻本、一九七三年五月）と大島義夫・宮本正男著『反体制エスペラント運動史』（三省堂 一九七四年七月）を参照した。

最後になって恐縮であるが、心よく稿本をご提供下さいました比嘉春潮翁、本稿本の発見に端初を開いて下された池田、中村両氏、さらには本稿本の発表に貴重な紙面をたまわれた本誌編輯委員会諸氏に衷心からの謝意を表明して紹介の拙文を閉じたい。

戴 国 燁

（アジア経済研究所主任調査研究員）
（立教大学文学部史学科兼任講師）